

新連載

## 舞鶴の歴史をたどる

## 最終回 城下町と村との交流

あせく おおば  
—朝来・大波村の御通帳より—

舞鶴市文化財保護委員 高橋 聡子

大波村は大浦半島中ほどの朝来川下流に位置する村で、大波の湊は古くから巡礼者にも利用されていました。大波上の荒木柴原家は江戸時代後期に田辺藩志楽組大波村の庄屋を務めました。その家に残る御通帳などから、江戸末期の村びとの消費生活を少しく覗いてみたいと思います。

農村は自給自足していたと考えがちですが、村に課せられた諸年貢は、米・麦・胡麻・炭・茶などは現物納ながら夫米などの小物成や家運上などは銀納となっており、また商品・貨幣経済の進展につれて城下町へ出入りして物を購入することも多くなり、思いのほか現銀とかかわる暮らしであったようです。

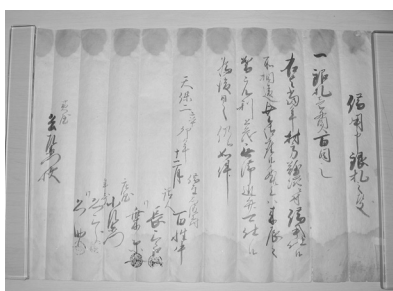
御通帳は、各店で一年間購入したものを年末にまとめて現銀（一部米）で支払い、受取の署名をして返却されています。

酒は東方の朝来中村に造り酒屋があり、個人でも利用していますが、村の行事で消費したものは一纏めにして支払っています。ある酉年に初午・愛宕参り道事・御代官へ上酒・天神にて祈念・雨乞い・惣分入用などで339匁4分9厘（1匁を米価ではぼ1300円と換算して約44万円）支払っています。酒1升2匁6分が7分でした。

志楽川尻の「市場」も、酒屋・油屋・糸屋などがある宿場町でありましたからよく利用されています。しかし、竹屋町を中心とした田辺城下町の軒を並べた店の賑わい、品数の多さとその垢抜けた品々は村びとの心を魅了したことでしょう。

大波村ともっとも深い関わりがあったのは広小路の夷（恵比寿）屋兵左衛門と思われます。種油・桐油・油粕などを

竹屋町鳥屋三右衛門、平野屋町湊屋源右衛門といった油屋からも買っていますが、志楽の市場出の「恵兵」からは油類購入以



借用申銀札之事



御通帳

外に村の困窮の際に借銀をしています。天保2年（1831）には当年村方難渋につき1貫100匁の銀札を借用し、一年後に元利とも返弁することを約束しています（利足1割）。不作や御用金要求のあるなかで、多くの村々でも同様に町中の資産家から借用して年貢米・上納銀を納めました。

さらに、城下町の夷屋には大波下に支店がありました。下大波夷屋は油類のほか鮫や薄縁・筵なども売っていますが、どうも舟を利用して城下町と大波湊間の荷物運送をしていたようです。未年に上納・検見の節などに1回につき7分（900円少々）年8回の舟賃らしき経費の計上がありました。

竹屋町の林屋六兵衛では小間物・太物・瀬戸物・諸色荒物類を扱っていましたが、荒木家は中折・半紙・ちり紙等の紙類、水引、扇袋入、かんざし、手拭、元結、ろうそく、草履、きせる・納戸ちりめん、黒呉服などを買っています。万小間物所の壺屋喜兵衛でも紙類や足袋を、広小路の白木屋與七郎店で傘、雪駄を求めています。堀上町の糍吉では呉服小物に仕立てもしていました。

魚屋の組屋與右衛門はじゃこなどの干物類のほかに進物屋のような仕事もしていたようです。誰様に万十とか京へ届けもの駄賃などと記されています。染物は近くの安岡村にも紺屋勘次郎がいましたが、福来村の紺屋重左衛門には多くの注文をしています。平野屋の鍛冶八兵衛ほかで鋏・のみ・なたなどを購入しています。新屋作兵衛、万屋宗七、瓦屋忠右衛門ほか多くの店との取引もありました。

明治になりますと商売の衰退があって店の交替がみられます。先の夷屋も明治直前の1868年1月には西園寺山陰道鎮撫使の本陣を務めました。その後店を畳んでいます（跡地は山喜旅館）。明治6年の学校設置に際して荒木氏は学務委員を務めています。城下町で新しく構えられた店舗で書籍や西洋小物（ランプ、珠算、白棒）などの購入をしています。

1年間ご愛読ありがとうございました。